

大学等名	山形大学・山形県立保健医療大学・東北公益文科大学・山形県立米沢女子短期大学・山形短期大学・羽陽学園短期大学
テーマ名	テーマ4：他大学との統合・連携による教育機能の強化
取組名称	連携・共有する教養教育プログラムの開発 - 県内高等教育の向上を目指して -
取組学部等	全学
取組担当者	小田隆治
取組期間	平成16年度～平成18年度
Webサイト	http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/juhyo/index.html

取組の概要

本プロジェクト「地域ネットワークFD“樹氷”（以下、“樹氷”）」は、山形県内の大学・短期大学（短大）の連携によって高等教育の機能強化を図り、県内の高等教育機関が共有する質の高い教養教育カリキュラムを開発し、単位互換を実施する取組である。このプロジェクトを遂行するために、平成16年4月に県内6つの大学・短大からなる「FD協議会樹氷」（以下、「FD協議会」）が設立され、活動を開始した。第一段階の平成16年度は、1)統一フォーマットによる「学生による授業評価」、2)合同の「公開授業&検討会」等のFD活動によって、相互に教育の質の保証を確保しその向上に努めた。第二段階の17年度は、持続的連携FD活動を基盤として、3)連携・共有教養教育カリキュラム、4)eラーニングを活用した遠隔教育、5)短大から大学への編入学プログラムの研究と開発を行った。第三段階の18年度はこれらを統合して単位互換を行うとともに、本取組の成果を検証した。

実施の経緯・過程

平成16年度に“樹氷”の活動を企画・立案・実施するために、大学・短大から選出された1名ずつの委員からなるFD協議会によって持続可能な運営体制ができた。FD協議会の各委員によって、各大学・短大の学長や教授会と緊密な連携を保った。

平成16年度の事業

- 1)大学・短大で統一フォーマットの「学生による授業評価」を実施し、統一様式で集計・公表し、大学の壁を越えて、教育データの透明性・共有化を図った。
- 2)上記の「授業評価」等を参考にして、「FD協議会」で各大学・短大の魅力的な授業を選抜し、それを公開することによって共有化を図った。
- 3)山形大学主催・“樹氷”共催で、授業開発法とシラバス作成法を学習する「FD合宿セミナー」を8月に一泊二日で2回、蔵王で実施した。樹氷の加盟校を始めとして、全国から多数の参加があった。
- 4)「公開授業&検討会」で得られた成果を各校に持ち帰り、各校単独のFDで改良・普及し、各教員の授業に応用した。
- 5)“樹氷”で合同FD研修会を開催し、上記の共有・交換・応用した成果報告と、更なる“樹氷”の可能性について検討会を行った。
- 6)ホームページ「Web FD樹氷」を開設し全国に向けて情報発信した。
- 7)点検・評価・改善に学生の生の声を活かす「FD学生モニター制度」を発足し、「大学生FD会議」を開催した。
- 8)“樹氷”の教育研究レベルを高めるために、国内外の教育先進大学に赴き調査研究を行った。
- 9)「FD協議会」で年間のFD活動を点検・評価し、次年度の改善に結びつける「樹氷-FD研究年報やまがた-」を発行した。
- 10)初年次学生を対象として「なせば成る！ 新入生の学習マニュアル」を発行した。

平成17年度の事業

前年の連携FD活動を継続し、次のような連携・共有教養教育カリキュラム、eラーニングを活用した遠隔教育、短大から大学への編入学プログラムの研究・開発を行った。

- 1) 連携・共有教養教育カリキュラムの研究と開発を行うために、各大学の教養教育カリキュラムの実態を調査し研究を行った。

- 2) 遠隔教育の開発のために、「樹氷」では山形大学のリモート講義システムを活用した。
- 3) eラーニングを積極的に活用して単位互換を行えるように、ハードとソフトの準備をした。
- 4) 短大から大学への就学がスムーズに接続できるように、「冊子」なせば成る！ 編入学ガイドブック」を作成し、短大生に配布した。

平成 18 年度の事業

連携 F D と eラーニングを活用した遠隔教育の構築を進め、本取組のまとめを行った。

- 1) 教養教育の単位互換を実施した。
- 2) 当該の学生に対してアンケート調査を実施し、eラーニングの問題点を抽出した。
- 3) 年度末に 3 年間の「樹氷」の活動を総括するために、「合同 F D 研修会」を実施した。
- 4) 「樹氷」の成果を全国の高等教育関係者と市民に公表するために、シンポジウムを開催した。

目的に対する成果、人材養成面での達成度

本取組の目標は大きく分けて三つある。一つ目は「学生による授業評価」や「公開授業&検討会」などの F D の連携による教育の質保証とその向上である。二つ目は、教養教育を中心とした eラーニングを活用した単位互換である。三つ目は、短大から大学への編入学プログラムの研究と開発である。

一番目の目標の F D の事業は計画通りに遂行され、山形大学が中核となって大学間で連携の取れた F D が発展した。そしてそれまで F D という言葉さえ知らなかった各大学・短大において F D が定着し、各教員が教育改善に従事するようになっていった。本取組によって、各大学・短大は自学の特性に合わせた F D を自律的に開始するまでに成長した。

二番目の目標は、それまで土壌のなかった大学教育の共有化や eラーニングをこの取組によって着手することができ、「樹氷」の参加校よりも広い範囲で山形県内の高等教育機関の単位互換協定を結ぶことができた。そこで実際単位互換が始まり、eラーニングやリモート講義による遠隔授業が開始された。大学間にカリキュラムや時間割の違いなど越えなければならない壁はまだ存在するが、この取組に採用されたことによって緒につけたといえる。

三番目の目標は、山形大学が短大に出向き担当者や学生と話し合いをして、そこにある問題点を抽出し、スムーズな短大と大学の接続を研究し、その成果を冊子「なせば成る！ 編入学ガイドブック」にまとめ、短大の学生に配布し、短大卒業後の選択肢の一つとして四年制大学への編入学を視野に入れる一助とした。実際、平成 19 年度には、「全国の公立短大で米沢女子短大が最多の 4 年生大学編入学者」となり、その記事が山形新聞（9 月 20 日付）に掲載された。

大学・短大の初年次教育のために、冊子「なせば成る！ 新入生の学習マニュアル」を発刊し、全学生に配布し、学生の大学への適応に役立てた。

本取組の各大学・短大の成果については次にその一部を記す。

「それまで漠然と考えていた授業・講義について、同一の尺度、基準で他の教員の授業・講義についての評価と比較できることで、教員の一人ひとりが、自分自身の授業・講義について、改めて見直し、考え直す非常によいきっかけになった（山形県立保健医療大学）」

「本学独自の F D 活動を押し進めていく他、「樹氷」の活動を継続し行っていくことで、山形県の大学・短大が一丸となって教育の質を高めるべく相互研鑽に励んでいきたい（山形短期大学）」

「「樹氷」として多くの事業に本学が参加し、多くの教員が他大学の F D の取組や考えに触れることができたことは、これまでの教育の検証と反省、今後進むべき方向性や課題の発見に有効に働いているものと信じている（羽陽学園短期大学）」

自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

本取組によって、県内の高等教育機関の相互交流が一挙に高まった。特に、この取組が F D を基盤としているため、それまでほとんど交流がなかった教職員や学生の結びつきを強めることに成功した。

これまで認知度の低かった山形県内の大学・短大が「樹氷」の参加校として、県内のみならず全国的に認知されるきっかけとなった。このことは受験生確保の一助にもなったと考えられる。

本取組によって、各大学では F D 活動が活発となり、この取組なくしてはその用語さえ知らなかったかもしれない eラーニングなどを山形県内の大学・短大で合同で進めることができた。これは山形県

の高等教育において、歴史的な教育改革として位置づけることができる。

各種FD事業を合同で実施することによって、各大学・短大においては、FDに割く人的・物的な経費の削減となり、大きな効率化をもたらした。

本取組は海外でも高い評価を得、本取組が評価されて山形大学は64の大学からなるニューヨーク州立大学機構と包括協定を結び、単位互換の交換留学による教育の国際化を推進することができた。

さらに授業改善の進展により学生参加型の授業が展開され、それが「エリアキャンパスもがみ」の初年次教育の体験型授業の開設にまで発展した。この授業は県内の他大学の学生の履修も可能とした。

本取組の成果は毎年「研究年報」にまとめられ、この年報を参加校の教員はもとより、全国の大学・短大に配布し、広報活動に努めた。

平成16年度には、東北地方の特色GPと現代GPの選定校を一同に会した「21世紀の大学教育を拓く - みちのくGP交流シンポジウム - 」を開催し、東北地区の教育改善に貢献した。

本取組のうち「FD合宿セミナー」は全国の大学・短大へも開かれ、毎年全国から多数の教員の参加がある。こうして全国の大学のFDにも貢献した。

本取組は全国の大学等から高い関心が持たれ、全国の大学から本取組について講演依頼があった。

学生等の評価

本取組に学生の声を反映させるために、FD学生モニター制度を導入し、毎年、大学生FD会議を開催した。平成16年度には各大学から1名ずつの学生が参加する会議を1度実施した。それが学生と教員に評判がよかったので、次年度からは各大学2名の学生が参加する会議を年2度開催した。

第1回目の会議の主な話題は、1) 良い授業、良くない授業、2) これから大学・短期大学を良くするために、どのようなことを希望しますかであった。1) においては、各大学の具体的な授業について忌憚のない意見が出た。2) においては、大学間連携の重要性が指摘された。

第2回目の会議の主な話題は、1) 各大学・短期大学の良いところ・悪いところ、2) これから大学・短期大学をよくするためにはどのようなことを希望しますかであった。1) によって各大学・短大の特性を相互に理解することができた。2) においては、この会議で話し合われた成果を学生が自学に持ち帰ることが話し合われた。学生のポストアンケートには、「自分の大学、他大学の長所・短所を見つけることができた」、「他大学が自分達の大学をより良くするために努力し、実現に向かって行動していることを知り、自分の大学でも行動を起こしていかなければならないと痛切に感じた」、「学生生活を改善していくための活動は、学生自身から自発的に行われなければならないものですが、他大学との連携などは教職員の方々のご協力に支えられて初めて実現しているのだと感じました」など、前向きな意見が書かれていた。

第3回目の会議の主な話題は、1) 2つの学生発表、「大学と学生」、「だがしや楽校を庄内に広めよう!!」、2) 岡山大学の事例紹介「岡山大学の挑戦：学生参画型の教育改革」、3) 討論、であった。具体的な事例に基づいて、実りのある討論がもたれた。ポストアンケートには、「日本の大学も、FDのような活動が源となって変化していけたらよいと思いました」、「学生の中には不満は持っているけれど、どこへ発信したらよいかわからずにいる人がたくさんいると思います。そういった人たちともコンタクトがとれるよう、“樹氷”の活動の普及と現在の活動の継続をしてほしい」、「もっと多くの学生が“樹氷”の取組について興味を持つことができれば多方面からの視点での話し合いができると思う」、「大学を活性化させるには、学生主体で教員、地域、またその他にも連携していくことが大事だと思った」などの意見が記されていた。

第4回目の会議の主な話題は、1・2回目と同じである。ポストアンケートには「“樹氷”の活動自体はものすごく重要なことだと思うし、すごいと思う。しかし、まだまだ認知度が低く、それがもっていないので、もっと広め、学生が大学に関われる機会を増やしてほしい」、「もっと大学・短大同士で交流してほしい。各大学の中で“樹氷”をもっと広げる努力をしてほしい」、「FD会議に参加したことで、“樹氷”の存在を知ることが出来た。各大学が活性化されていくためには、とても大切な活動だと感じた。もっと多くの人に知って欲しいと感じた」などの意見が出た。

第5回目の会議は主に「“樹氷”への学生の関わり方」が話題となった。ポストアンケートには「先

生方が大学を変えるためにどのような取組をしているのか、私たちの要望についてはどのように考えているのか、またそれはなぜか、というような普段は聞くことができない先生方の声や、大学の実情を知ることが出来、大学に対する不信感が少しだけ解消できた」、「“樹氷”に参加していない大学も参加して、県内すべての大学が参加できれば良いと思う」などの意見が出た。

以上のように、大学間連携の本取組は学生たちに高く評価されている。学生には本取組の評価が高い分、学生は大学内での“樹氷”の認知度の向上を期待していた。

大学間の単位互換を現実的なものとするために、eラーニングの研究と実践を進め、その一環として4大学・短大の13名の学生をモニターとして平成18年12月から19年2月まで実施した。視聴後にアンケートを実施した。その結果、70%の学生が見やすかったと回答した。モニターの意見としては次のようなものが寄せられた。

「自分一人だけで受講できるので集中して授業を受けられること、途中で停止して席を外せることなどがeラーニングの良い点であることがわかった。能動的な気持ちで受けたので本当に面白かった。父も弟も一緒に楽しく受講した。来年大学受験の弟は大学の授業の参考になったようである」

「短大から四年制大学へ編入することを目的としているので、この授業を受けた。同じ授業を履修している他大学生と掲示板で意見交換できるのもよかった。Eラーニングや単位互換はまだまだ利用されていないので、もっと広がって、みんながいろんな大学の授業を受けられるようになればいいと思う」

以上のように、eラーニングを受講した学生には好評を博している。これから学生との双方向性を確保しながら、遠隔授業に関するハードとソフトを充実していかなければならない。

学外からの評価

本取組を外から評価点検しそれを改善に生かすことを目的として、「諮問委員会」を設置し、毎年度末に委員会を開催した。諮問委員会は高等教育の専門家や地元の教育者の総勢5名から構成した。山形県の高校長を経験した諮問委員の発言は次の通りである。

「今日まで、我が県内の6大学が同じ方向を向いてこのような素晴らしい取組をやっていることは知らなかった。山形大学のホームページを開くと載っているのかもしれませんが、我々はこのようにして積極的に授業改善を行っているということをもっと広報すべきではないかと痛切に感じます。待ちではなく攻めの姿勢でPRすべきと思う」

このように、本取組は県内の小中高の教育関係者から高い評価を得ている。

諮問委員から本取組が大学間連携FDの全国のひとつのモデルになりうるという高い評価を得た。

報道としては、“樹氷”の協議会が設立した日には、県内のほとんどすべてのテレビ局がニュースで流し、新聞(山形・朝日・河北)にその記事が掲載された。このように、県内の大学・短大が取組む大学間連携による教育改革は県民に高い関心が寄せられた。

最近では、平成19年7月10日の読売新聞の「教育ルネサンス」に「教師力 大学編(6)授業診察 他校と連携へ」というタイトルで“樹氷”の取組が掲載され、全国的に大きな反響となっている。

取組支援期間終了後の展開

本取組の内、単位互換については山形県内の9高等教育機関の間で、単位互換に関する包括協定が結ばれ、この「大学コンソーシアムやまがた」において、現在リモート講義やeラーニングによる遠隔授業を継続的に推進している。

本取組によって、県内の大学のFDは、山形大学を中心とした統合型ネットワークから各大学が自立性を持った分散型ネットワークへと発展した。各大学・短大はそれぞれの特性に基づいてFDを発展させていきつつ、その成果を大学間で共有し、分散型ネットワークの“樹氷”を発展させていく。

山形大学としては、本取組の成果をさらに発展し、FD拠点としての「高等教育研究企画センター」の充実、「FD・授業支援クリニック部門」による個別支援型FDの確立、WebFDの確立、東日本地区のFD拠点の形成、に取組んでいく。現在、の取組によって授業改善に実践的であり有効なFDシステムを構築している。“樹氷”を始めとして得られた成果は、県内はもとより東日本地区の小さな大学や短期大学に直接・間接的に還元していく。